

# 幼児保護者の皆様へ 父と子が遊ぶ幼児算数活動の勉強会のご案内

『5までわかれば算数はできる』

平成31年2月

NPO法人幼児算数教育研究所理事長 植村憲治

桃の節句も近づいてきて、春が間もない時節ですが、皆様御元気にお過ごしのことと存じます。

日に日に成長していくお子様と過ごす時間は、何物にも代えられない安らぎと明日への活力をご両親に授けるものと存じます。そのような中にもふと、あどけない幼子が成長したのち、社会の荒波を乗り越えて行けるだろうかと不安がご両親の胸をよぎることがあるのではないのでしょうか。対人関係もさることながら、学力、特に算数・数学についてご心配の保護者も多いことと存じます。

3歳児で10まで数えるお子さんは相当います。そのようなお子さんでも、3個と1個のクッキーそれぞれをお皿に載せて、「どっちのクッキーが多いですか」と尋ねるとよくわからない場合があります。その子たちに、大人がいくらやさしく、「こっちのお皿はいくつある?数えてごらん。ではこっちはいくつ?ひとつとみつつだね、どっちが多い?」などと尋ねても幼児が楽しく感じることはありません。思考力の発達にもつながりません。そしてここには、自分で考えることの指導や遊びの要素は何もありません。

“多い・少ない”は数量の概念ですから、数の概念がある程度理解できなければこれを正しく用いることはできません。3歳では、10まで数えられても、数概念がそこまで発達していない幼児も大勢います。

では、どうやって幼児と遊べばよいのでしょうか。

私は、象さんの人形を用意します。そして幼児に「象さんが皆と遊んでおうちに帰ってきました。象さんはお腹が空いてクッキーをいっぱい食べたいと言っています。どっちのお皿のクッキーを象さんにあげますか」と問います。この手法ですと、“多い・少ない”という算数・数学の用語を用いないので、幼児が場面を簡単に理解できます。そして、この問いかけに対して幼児が脳をフル回転させて自分で考えていることが表情からうかがえます。一所懸命考えることの楽しさをわかってくれます。

この手法の意義と応用、また他の手法や基本的な考え方、してはいけない指導などを皆様とお話していき、同伴の幼児と実際に遊んでみます。

ご関心のある方はぜひご参加ください。